

第十八章 節の種類

節に種々の種類のあると云ふ事は、第十五章及び第十六章に述べた所でも略々概括は出来ようと思ひますが、次の章の豫備として茲に纏めて御説明を申し上げて見たいと思ひます。

節は之を、附屬節、從屬節、並立節の三つに分けることが出来ます。

(一) 附屬節と云ふのは節が文の主要成分の役目をして居るものを云ひます。之に準體節及び敍述節の二つがあります。

(1) 準體節と申しますのは體言に準じて用ゐられた節の事でありまして、體言の如く主語にもなり、補語客語にもなり、指定又は比況の助動詞の連なる場合には、述語の一部にもなるのであります。例へば

夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。」「孔子間居曾子侍坐」は玄宗の御筆孝經には「孔子居曾子坐」とあり。

輸出品で價格の千萬圓を越えて居るのはどの位あるだらう。」「花が咲く」は單文だ。

附屬節

準體節

は主語として用ゐられたもの、

其の困難なる、盲人の杖を失へるに同じ。「哨艦敵艦見ゆ」と報ず。

此の事業は人の想像して居るよりもむづかしい。今日雪が降らうとは、思はなかつた。

は補語として用ゐられたもの、

多くの人は、おのが心の愚かなるを知らず。「歌書よりも軍書に悲し」を解釋せよ。

走つて石の轉がつて落ちるのを避ける。「天莫空勾踐を天勾踐を空しうするなかれ」と讀むのは誤だ。

は客語として用ゐられたもの、

船人の島と見しは雲の海上に浮べるなりき。「土の世に處するは錐の囊中にあるが如し。

雪のやうに見えるのは花が散つて居るのだ。「海と陸とに押樹てた赤旗はまるで火が燃えたつやうだ。

は指定又は比況の助動詞を伴つて述語に用ゐられて居るので、述語の一部

になつて居るのであります。

準體節は文の主要成分になるばかりでなく、時としては其の修飾成分になることもあります。例へば

有明の月ばかりこそ通ひけれ、來る人なしの宿の庭にも。

藪蛇と云ふことを藪をつゝいて蛇を出す。の意味に解するのは無理だ。

は形容的修飾語として用ゐられたもの、

「雨止みぬ」とて出づ。

木の葉の散り布いたのに眠る。

は副詞的修飾語として用ゐられたものであるのとあります。

✓(2) 敘述節と云ふのは總主語に就いて其の一部の屬性を敘述する節を云ひます。例へば

此の猫は何の能もなし。彼は學力優秀なり。

牛は力が強い。彼は體が達者だ。

✓(二) 從屬節と云ふのは二つ又は二つ以上の節に於て或物が他の物と從屬

敘述節

從屬節

の關係を以て結合されるものを申します。之に形容節及び限定節の二つがあります。

✓(1) 形容節と云ふのは體言を形容する節を云ふのでありまして、主語でも補語でも又は其の他の成分でも體言は之を形容するのであります。例へば

瀑の落つる音 百雷の鳴りはために似たり。

櫻の咲く頃は一年中で一番好い季節である。

の如きは主語を形容したもの、

華やかなりしあたりも人住まぬ野らとなりぬ。

扶桑青年會は本部を交通の便利な土地に移した。

の如きは補語を形容したもの、

磯邊の船は潮のさし來る時を待てり。

我が乗つて居る汽船は嘗て常陸丸が露艦に襲はれた玄海灘を過ぎ

た。

の如きは客語を形容したもの、

彼所の森こそ神の鎮まります所なれ。

河原君は行の極めて正しい人であつた。

の如きは述語の一部を成す體言を形容したもの、

義經が蝦夷に渡りし後の消息は詳かならず。

花の咲き亂れた木の下に人が大勢集つて居る。

の如きは形容的修飾語を形容したもの、

月の明かなる夜、舟に乗りて河を下りぬ。彼は庭訓の嚴肅なる家にて人となれり。

展覽會の出品は昨日私の參りました時には、もう大抵整頓して居ました。「一人が倒れた上に又一人が倒れた」。

は副詞的修飾語を形容したのであります。

形容節と形容
連語との紛れ
る場合

却説此の形容節は主語の述語を有つて居る連語と紛れることがあります。それは何う云ふ場合に紛れるかと申しますと、嘗て第六章第二節で連體形の四つの場合をお話した中の第二、第三の場合、即ち述語の役目を勤めて居る用言が其の意味を補充する客語を形容するとき、及び述語の役目を勤めて居る用言が其の意味を補充する補語を形容するときに起るので

あります。例へば

君が植ゑあきし櫻の木蔭もなつかし。

「ほのぼのと」云ふのは人麿が詠んだ歌だ。

と云ふ文の「君が植ゑあきし」「人麿が詠んだ」は主語述語を具へて居て、一寸見れば節のやうである。けれども仔細に調べて見ますと云ふと、「植ゑあき」「詠む」と云ふ述語の役目を勤めて居る他動詞の客語がない。其の客語は下に來て上の部分に依つて形容されて居る。それから又

彼の乗りたる汽船は明朝六時に着すべし。

私が高等學校で國語を教へた生徒はもう大學を卒業致しました。

と云ふ文の「彼の乗りたる」は主語述語を具へ、「私が高等學校で國語を教へた」は主語客語及び述語を具へて、何れも節のやうでありますが、此等を仔細に調べて見ますと云ふと、「乗る」と云ふ述語の役目を勤めて居る不完全自動詞の補語がなく「教へる」と云ふ述語の役目を勤めて居る不完全他動詞の補語がない。其の補語は下に來て、上の部分に依つて形容されて居る。即ち以上の如きものは何れも節の構造に必要な成分を缺いて居ますので、節と

限定節

申すことは出来ない、矢張連語と申さなければならぬのであります。

✓(2) 限定節と云ふのは副詞の如く語句を限定する節を云ふのであります。

例へば

霜は色うるはしく木々の梢を染め出せり。物價騰貴して細民生活に苦しむ。その志はよきにもせよ、其の行はよみすべきにあらず。

使の男が矢の飛ぶように走つて来る。腹の裂けるほど食べた。道は遠くても一度は來給へ。

並立節

Y(三) 並立節と云ふのは二つ又は二つ以上の節に於て何れが何れに屬すると云ふことなく、各對等の關係を以て結合されるものを申します。例へば

雨降り風吹き、神鳴りはためく。富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。

陸軍は奉天で破られ、海軍は日本海で滅ぼされた。父は有名な實業家で、子は大學の教授だ。

並立節は多くは上の節の述語を中止形にして下の節に連續するのでありますが、嘗ても申しました如く、對話體の口語に於ては中止形を用ゐるこ

とが殆んどありませんから、多くは或事柄に他の事柄を添へるときに用ゐる第四類の助詞で結合することが多いのであります。

酒もあれば肴もある。空には雲雀が鳴いて居るし、林には鶯が鳴いて居る。莖が細くて、中が空だ。

✓以上述べました附屬節從屬節及び並立節は各、他の種類の節を含むことがあります。例へば

雨の降りたるに、來聽者の多かりしは、講演者の學徳の高さにもよるべし。

體の悪い人が過度に勉強するのは悪い。

は附屬節が從屬節を含んで居るもの、

規模の雄大にして建築の宏莊なる、實に天下に冠たり。

支那は面積も廣いし人口も多い。

は附屬節が並立節を含んで居るもの、

(ワレ)路のほど如何あらむと案じたりしに誠に安らかなりき。

太郎は人の惡口するのを詠へたので父に譽められた。

は從屬節が附屬節を含んで居るもの、

陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅ぼされしかば、露西亞も遂にわれに及ばざることを知れり。

某會社は人品がよくて、交際の巧みな外交員を募る。

は從屬節が並立節を含んで居るもの、

彼の辯舌は獅子の咆吼するが如く、彼の態度は大鵬の翱翔するが如し。

蕨を取るのは春で、茸を取るのは秋だ。

は並立節が附屬節を含んで居るもの、

形病めば心も病み、形盡くれば心も盡く。

天氣の善い日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。

は並立節が從屬節を含んで居るものであります。

附屬節・從屬節及び並立節は又自分と同じ種類の節を含むことがあります。

例へば

富士の山を白扇のかゝれるに譬ふるは既に事舊りたり。

先生が青い旗の揚つて居るのは雨天のしるしだ」とおつしやつた。
は附屬節が他の附屬節を含んだもの、

昨日は雨降りて道惡しかりしかば我は終日家に在りき。

祖母は去年私の歸省した時までは大層元氣だつたが、今は弱つて床に就いて居る。

は從屬節が他の從屬節を含んだもの、

春は花咲き鳥歌ひ、秋は實熟し紅葉散る。

學校では教師は生徒を愛し、生徒は教師を敬ひ、家庭では親は子を慈しみ、子は親を慕ふ。

は並立節が他の並立節を含んだものであります。